



Title	恩師 木村英一先生
Author(s)	宮内, 徳雄
Citation	懐徳. 1982, 51, p. 43-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90603">https://hdl.handle.net/11094/90603</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 恩師 木村英一先生

懷徳堂堂友会委員 宮内 徳雄

「宰我ステニ黄帝三百年ト云サヘモ人カトアヤシム」(「夢之代」無鬼下)。山片蟠桃は「夢之代」初稿本に「宰我の憤」と題を付けた。宰我の昼寝を孔子がなじり、朽木・蕢土之嚮になぞられた論語の故事からこの題を付けたのだが、章句師中井履軒に論され、「夢之代」と改題した。冒頭の章句のように、蟠桃は宰我の合理主義的批判姿勢に共鳴しているようであるが、履軒は孔子に疎まれ遂に謀反人となって師に恥をかかせた宰我の名を、愛弟子のライフワークの題名に使わせたくなかつたのではあるまいか。

そんな話を申し上げた時、木村先生は「孔子先生にとつては、宰我也可愛い弟子の一人に違いないのだ。」と一言静かにおっしゃった。これは先生の孔子観であると同時に、御自身が多量の弟子達へ抱かれて御真情の顯われと拝察された。時に文化大革命の真つ盛り、中国以上に日本も孔子批判が流行していた。孔子も人間である以上、弟子に対する感情に好悪の別はあつただろう。それは論語等にも散見される。そんな考えを持つた上での私の結論であつたが、先生のこの一言は教育を職として来た私にとつて、正に頂門の一針であつた。十年以上前の御言葉が昨日言われたようにまだ聞えてくる。蹊を成して

集まる天下の英才を薫陶されて来た先生にとつて、私などは言語弁辭においては到底宰我の才は無いにしても、怠惰不遜の面ではさしも宰我に劣らぬ御迷惑な存在であることをひそかに自覚していたため、この御言葉の前では身の置き所もない恐縮さと、涙が溢れてくるような有り難さを感じた。京都一中以来の最高弟であられる本田濟先生は、木村先生を孔子に擬せられたが、最末席の不肖の弟子である私は、無私不偏の愛を以つて師道を貫ぬかれた木村英一先生を、孔夫子以上の御人格に仰ぎ見るものである。

懷徳堂堂友会会長としての先生は、御健康をも犠牲にされて会務に率先垂範された。中道にして薨せられて一年、堂友会の将来を案じられた御遺志は先輩委員諸賢の御奮励によつて万端滞りなく活かされつつある。この秋中国に旅立つ私は、中秋明月の夜西安に着く。彼地在任の同門塘耕次君に会い、先生の御遺影を満月に映して三人となりたい。中国再遊を庶幾されていた先生は、にこやかに杯を挙げて長安一片の月を邀えられるだろう。

本誌五十号四頁七七八行「先生の女孀中川幸三氏」の「女孀」は「縁家」の誤記でした。訂正させていただきます。